

# 刀剣の文学史

——古代・中古を中心に——

長塚 祐季

## 刀剣の伝来と銘文について

銅剣の伝来であるが、弥生時代中期の細形銅剣と呼称される剣はその多くを朝鮮半島からの伝来とされる。そして弥生時代後期に出現する広峰型銅剣は日本で造られるとともに実用的形態を離れたものとなる。つまり日本で量産されたのは祭器用の銅剣ということである。このように日本の刀剣の歴史は朝鮮半島や中国大陸に密接に関わっている。また古事記、日本書紀が書かれた時代はまだ金属はあまり流通・生産が行われておらず、金属の武器は舶来品を入手できる権力者のみが持てる貴重品だったと考えられる。

現存する古事記に登場する剣は、愛知県名古屋市熱田神宮

の草薙剣<sup>①</sup>、茨城県鹿島神宮の薙霊剣<sup>②</sup>があり、また古代のものと思われる剣は奈良県天理市石上神宮の七支刀<sup>③</sup>、稲荷山古墳から発掘された金象嵌辛亥銘剣<sup>④</sup>、江田船山古墳で発掘された銀象嵌銘大刀などがある。

次に銘文の刻まれている刀剣である。これまでに発見された銘文入りの古代の刀剣は古代から中世のものを数えても二十例に満たない。ただこの他にも現存はしていないものの、文献資料から銘が刻まれていたとわかる例もあり、既に失われてしまったものや、未だ発見されていないものを考慮すると銘文入りの古代の刀剣の量はもっと多いと推測される。

銘文とは基本的にその剣を造った理由を示すもので、刀身に漢文で書かれている。しかし完全な状態で発見されることはほとんどない。全く消滅してしまった文字に関しては、漢

文の文法知識を使うことで、原文を推測している。そのため、各文の原型、訓読の仕方など研究者毎に解釈が分かれるため、定説と言えるものがない事も珍しくない。銘文は吉祥句と思われるものを四字のみ刻むものから、百字を越える内容を刻むものまである。

また銘に限らず刀身にはしばしば彫刻があり、古刀にはそれが多い。谷村瀨の『日本刀の冶金学的研究』<sup>10</sup>によれば、

昔から有名な刀工で刀身に仏像を刻したものが多くある。火災を背にした不動明王、あるいは剣または剣巻き龍（俱利伽羅）が好んで彫られる。刀の彫刻は美の他に宗教的な意味をもつ。更に簡単に刀身に梵字や独鈷（仏具）を彫刻した刀が多い。このことは日本刀の彫刻は単に装飾的目的以外に、所持者に精神的影響を与えていたことが明らかである。

と述べられているように、刀身の装飾もただの飾り以上の意味があると考えられている。また谷村氏は日本刀の発達の歴史を便宜上八期に分けている。（表二）

## 古時代における刀剣の捉えられ方

①古事記に登場する特別に命名された刀剣は、十拳劍（天之尾羽張・伊都之尾羽張）、生大刀、十掬劍（大量・神度劍）、頭椎の大刀、布都御霊（佐士布都神・甕布都神）、草薙劍（天叢雲劍）の七振りである。以下は各劍の特徴である。

まずは伊耶那岐が使った十拳劍について述べたい。伊耶那美は火の神である火之迦具土神を産んだ際に女陰を焼かれ病み伏し、それが原因で神避ることとなる。それを悲しんだ伊耶那岐が火之迦具土神を切り殺す際に用いられた。そしてこの場面で天之尾羽張・伊都之尾羽張という別名があることが挙げられる。そしてその後、伊耶那岐が伊耶那美を追って黄泉国に行くが、そこで変わり果てた伊耶那美の姿を見た伊耶那岐は黄泉国から逃げ帰る。その際、黄泉国の醜女を振り切る時に後ろ手に振るった劍でもある。

続いて天照大御神と建速須佐之男命の宇気比の際に登場する十拳劍について述べたい。海原を治めるようにいわれた建速須佐之男命は泣いてばかりで国を治めなかったために、伊耶那岐命に国から追い出されてしまう。そして天照大御神に

暇乞いをするために高天原に向かうが、天照大御神は建速須佐之男命が邪心を持っていると考え武装して待ち受ける。その際に建速須佐之男命が邪心のないことを示すための宇気比で天照大御神が建速須佐之男命の佩いていた十拳剣を使う。十拳剣が武器として使われないのはこの場面のみであり、この宇気比自体も宣言をあとからするという点で異例の宇気比であるといえる。

次に根の堅州国で大国主が手に入れた生大刀<sup>12</sup>であるが、須世理毘売などに助けられながら数々の試練を克服した大国主は、須佐之男大神が寝ている隙に生大刀と生弓矢と天の沼琴を奪って逃げる。その後、大勢の兄弟の神々を追い払い国をつくった。生大刀と生弓矢は武威の象徴としてかれ、これらを使うことで大国主は兄達を打ち破ったとある。実際に凶器として使われる描写はない。

次に登場するのは阿遲志貴高日子根神が所持し、実際に武器として使われた十掬剣である。別名は大量、神度剣という葦原の中つ国の国津神を言向ける為に高天原から遣わされた天若日子だったが、地上を自分の物にしようとし、高天原に背いたために射殺される。そして天若日子の義兄にあたる阿遲志貴高日子根神が弔問にくるが、二人がよく似ていた為、

親族達は天若日子が生き返ったと勘違いしてしまう。死人に間違えられた阿遲志貴高日子根神はひどく腹を立て、この剣を用いて喪屋を切り倒した。ハは刃、カリは刈・切の連用形と推測される。神度剣の度は形容詞トシ（鋭）の語幹の濁音化したものとされる。

次は天孫降臨の際に天忍日命と天津久米命が身に着けていた頭椎の大刀について述べる。邇々芸命が天照大御神の詔命を受け、高天原を離れ、天の浮橋を通り、筑紫の日向の高千穂の久士布流多氣に降り立った。その時先導していた天忍日命と天津久米命が腰に帯びていたのが頭椎の大刀である。装備<sup>13</sup>の一つとして描写されているだけで実際につかわれる場面はない。

次は建御雷之男神が天孫降臨の際に使用した十掬剣について述べる。天菩比神と天若日子が言向けに失敗した為、第三の使者として建御雷之男神が天鳥船神とともに遣わされる。二神は出雲国の伊耶佐の小浜に降り、建御雷之男神が大国主神に葦原中国を譲るように迫った時に波頭<sup>14</sup>に十掬剣を立て、その切っ先に座することで大国主を威嚇した。なおここでは前述した伊都之尾羽張、天之尾羽張がそれぞれ神として扱われていて、建御雷之男神は伊都之尾羽張神の子と書かれている。

最後に布都御霊（佐士布都神）は神武天皇の東征の際に登場した。後の神武天皇である神倭伊波礼毘古命は天下を治めるのにふさわしい土地を求めて東に行き、熊野に上陸する。

その際に大熊が現れ、その毒氣にあてられて一行は昏睡してしまう。そこで高倉下が現れ、一振りの大刀を献上すると軍勢はたちまち正気にかえり、熊野の山の神はひとりりでに切り倒された。そこで神武天皇が大刀を手に入れた経緯を高倉下に聞くと、建御雷神が以前その国を平定した大刀を高倉下の元に落とすので、それを神武天皇に献上したという。切れ味の鋭い、心霊の宿った剣。神武天皇東征の際、その軍勢が熊野で大熊の靈氣のために失神した時、高倉下が奉った剣で、のち石上神宮に納められた。布都はフツリト、フツフツトなどのフツで、物を勢いよく断ち切る音を表すとされる。

また古事記以外の文献には、播磨国風土記揖保の郡越部の里の文にも刀剣に関する記述がある。内容<sup>15</sup>は犬猪という人物が土中から掘り起こした剣が鏡のように光って錆びておらず、鍛冶職に焼きを入れてもらおうとしたところ、蛇のように伸び縮みしたので、神剣だと思い朝廷に献上したという。前述した七支刀は日本書紀に記事がある。

このように古代において刀剣は神秘的な力を与えるものの

象徴として描かれている。また古事記の中では特別な力を持った剣を入手して武威を得るという話は一つの型となつていとも考えられる。

これらの刀剣は実際に破壊や殺害の為に使われるという描写は少なく、その様な形で登場した剣は十拳剣・十掬剣と称されるものだけである。古代の物語において凶器や武器そのものとして使用したり、且つ一振りでない刀剣は「頭椎の太刀・十握剣」のように形状を想像させる名前がつけられ、また力の象徴や武運を呼び寄せるものとして活躍している刀剣に関しては、形状を直接説明していない名前がつけられている。

### 中古における刀剣の捉えられ方

平安時代になると刀剣に関する記述の量が少なくなってくる。これは規模の大きな戦がなかったこと、この時代の文献の主な書き手が女性だったことが原因だと考えられる。ただ文献として登場している量が少ないだけで、武器として刀剣はこの時代も重要な役割を果たしている。また日本刀の鍛冶技術が劇的に発達したのはこの時代であるため、刀剣史にお

いても平安時代は非常に重要な時代だと言える。藤田達生氏の「刀剣書<sup>17</sup>の成立―「諸国刀鍛冶系図書」を素材として―」によると、

「系図写」中にみられる代表的な刀工について、各時代ごとにふれたい。現在、もっとも確実な最古の刀工は、平安時代に活躍した伯耆国の安綱である。有名な京都粟田口の三条小鍛冶宗近は、それに半世紀ほど遅れる。このほか備前国やあるいは九州などでも、同時期に名工が登場するようになる。日本刀が本格的かつ大量に制作されるようになるのは、鎌倉期である。その原点は、鎌倉幕府との対決に備えた後鳥羽上皇（一一八〇―一二三九年）により、番鍛冶制度の創設とされる。

とある。つまり量産はまだされなかったものの、平安時代になると、名工とされる存在が現れ始めている。

次に歌物語の中における刀剣の扱いについて述べたい。

源氏物語夕顔<sup>18</sup>の巻には悪霊と対峙した時に構えている場面があるものの、その場面でも戦闘用に刀を持っていたというより、装飾品として持っていたものを構えただけといった印象である。

他の物語でも刀剣が登場する機会は少ない。伊勢物語や

竹取物語<sup>20</sup>には刀剣が登場する場面はない。竹取物語の中でも戦いには弓が主体であるように描かれている。

また随筆の枕草子には「たちは」<sup>21</sup>「めでたきもの」<sup>22</sup>「細太刀に平緒をつけて、清げなるをのこ」の段に刀剣についての記述が見受けられる。しかし枕草子には武器ではなく装飾品としての刀剣が描かれている。

一方戦物語の中には刀剣が登場する場面が多く見受けられる。将門記・陸奥話記・保元物語<sup>23</sup>の中では武器としての刀剣が描かれている。以下は各物語について述べる

将門記の中では戦の主力は弓矢であるように描かれている。また弓を枕にしていたといった描写からも、武器と言えば弓という風潮が見受けられる。「剣をふるって自ら戦った」などというように刀は追いつめられている時の状況を表す描写として、また切腹や介錯など止めをさす場面、もしくは室内の戦闘において主に用いられている。つまり戦の際は弓主体で戦い、刀は補助的な武器として使用されている。特別な名を冠する剣や、大きな刀など刀そのものについて描写される場面も登場しない。

陸奥話記は将門記に比べると刀剣が活躍する場面が多く見受けられる。ただ武威を示す場面では弓の腕について述べら

れており、また「剣の先で切り立つ崖に足場を鑿ち」など、武器以外の用途にも使われている。また「決死の兵数百人が鎧を着て剣を振るい」など、接近戦や劣勢な状況の表現の描写としても登場している。

保元物語には御剣、宝剣という言葉が登場し、三種の神器として、祭器の働きをしている。戦は弓主体で描かれている。刀は死体から首を獲る時や、止めをさす際に主に使用され、戦の際は屋内など接近戦をしなければならない時のみ使用されているように見受けられる。三尺八寸もある太刀の記事があるが、刀工についての記事はない。

細かい差異はあるものの、どの作品も戦の主力は弓矢であるように描かれている。つまり戦の際は弓主体で戦い、刀は補助的な武器として使用されている。大きな刀など刀そのものについて描写される場面は保元物語にあるが、特別な名を冠する剣はこれらの作品には登場しない。武威を示す場面では弓の腕について述べられている。

このように鍛冶技術は発達していたものの、文献の中には表れていない。しかしこれらの文献を元に刀剣が実際に使用されていなかったと考えるべきではない。前述したように書き手が女性であることや、大規模な戦が少なかったために刀

剣の記述が文献にまとめられる機会が少なかったことも考慮する必要がある。

### 差異・移りかわりの比較

武威や加護の象徴として使われた刀剣（生大刀、布都御霊、草薙剣（天叢雲剣）は形状を説明する以外の言葉で特別な名前がつけられている。また実際に凶器として使用された剣には、十握剣、天之尾羽張（伊都之尾羽張）、十掬剣（大量・神度剣）、頭椎の大刀）形状の説明がそのまま剣の名前になっているものである。七支刀は形状を表した名ではあるものの、刀剣なのに七つに分かれている形状ということは、実用性ではなく、祭器としての面が強調されているのだと考えられる。

つまり祭器としての剣は形式を言葉で描写することが難しく、また最も強調したい点は霊威な為、特別な名前が付くことになったのではないか。そして戦闘の際に用いられる刀剣にはリアリティを出すため、現実的な素材や形体を描写する名前が付けられるのだと考えられる。

一方中古の刀剣は武器として流通していた量も少くない

ため、身分の高い人だけが使用するわけではない。またピッケル代わりに使われていたりするので高貴なものというイメージもない。そしてこの時代では剣の腕より弓の腕を主とする傾向も見受けられる。そのせいか祭器として用いられる刀剣は、保元物語の中に三種の神器としての宝剣が登場することが確認出来たものの、数は多くないと考えられる。このように刀剣から神秘的なイメージは離れていったため、特別な名前を持つ刀剣も登場しなくなったのではないか。古代には特別な名前を持つ刀剣が複数登場するのに対し、中古の物語ではそれが見受けられないのは以上のことも要因の一つと考えられる。

\*\*\*\*\*

(表二) 引用

七〇〇～一一八一 平城(奈良)から(平安)

宮廷政治時代

一一八二～一二八五 政權武士に移る。

鎌倉幕府の前期

一二八六～一三八五 蒙古襲来あり(一二六二～七六)

鎌倉幕府後期から南北朝時代に作風の変化がある。

一三八六～一四六〇 足利氏が京都に幕府を開く

この時代太刀から刀に変化し脇差が作られる。

一四六五～一五九三 戦国時代

実用刀の需要が多い。美術的に劣る。

一五九四～一八〇〇 江戸幕府の前期

実用と美を兼備した刀の需要が旺盛。

一八〇一～一八六六 幕末の頃多くの刀工が

古刀第三期以前の刀を努力をした。

一八〇七～一九八〇

明治維新廃刀令により実用性終焉、美術刀としての鑑賞研究が進む。刀工の技術保存奨励の要あり。

\*\*\*\*\*



(1) 細形銅剣、朝鮮を含む大陸において鑄造され、海を越えて舶来された長さ三〇cm前後の短剣。『改定銅の考古学』(中口裕 雄山閣出版 1972年10月20日)

(2) 広形銅剣ともいわれる。身幅が非常に広く、両端の刃部が平行し、峰の部分でさらに広がる。出典は(1)に同じ。

(3) 「神話伝説に表象される剣術(刀剣)についての考察(1)」(著金子國吉 1976年)より引用した。金子國吉氏は、

(中略) 武器の祭器化は、おそらく大陸文化の影響を受け、特に刀剣文化は大陸の刀剣伝説に発し我が国の風土、慣習に適合変容していたものと推測してよい。在来の石器、土器に加えてこの新しい金属の祭器と原始祭儀あ縄文期の呪術信仰よりも盛行し、かつ周期的に行われていたものとみてよい。

(4) 直接見ることが出来ないため、見たもしくは触れたという人が残した文献から形状を推測することになる。『玉籤集裏書』には次のような記述がある。

八十年ばかり前、熱田神宮社家四、五人と志を合せ密々に御神体を窺ひ奉る。土用殿の内庫に入るに雲霧立塞がりて物の文も見えず。故に各扇にて雲霧を払い出し、隠し火にて窺ひ来るに、御璽は長さ五尺ばかりの木の御箱也。其内に石の御箱あり、箱と箱の間を赤土にてよくつめたり、右の御箱内に樟木を箱の如く、内をくりて、内に黄金を延べ敷き、其上の御神体御鎮座也。石の御箱と樟木の間に赤土にてつつめり。御神体は長さ二尺七、八寸計り、刃先は菖蒲の葉なりにして、中程はむくりと厚みあり、本の方六寸ばかりは、筋立ちて魚などの脊骨の如し、色は、全体に白しと云ふ。

『玉籤集裏書』玉木正英口授・岡田正利記 未見のため、『古代刀と鉄の科学』(石井昌国 佐々木稔 より引用した)。

(5) きわめて長大な剣で、三つの刀身が鍛着されている。全長二二・五cm 元幅四・二cm。十一世紀前半に作られたとされる。こちらは展示されている。フツノミタマという名で現存する刀剣は奈良県石上神宮にもあり、そちらは布都御霊剣と書かれる。

(6) 日本書紀に登場し四世紀に朝鮮半島の百済の国から伝来したとされる鉄製の刀で、石上神宮の御神宝として奉祀されている国宝。刀身の左右に段違いに三本ずつ両刃の支鉾がついている非常に珍しい形状をしている。このような形状の剣はいまだ他には発見されていない。刀身の表と裏に合わせて六十字の銘文がある。

七支刀が奉られている石上神宮は、古くは石上坐布留御魂神社、また布都御魂神社、布瑠社などとも呼ばれ、布都御魂大神をまつる。軍事をつかさどっていた古代の有力豪族である物部氏が氏神として奉仕していた。石上神社の天神庫には多くの武器が収納され、武器庫としての役割もあった。垂仁天皇の時に大刀を千振り奉納されたという記述があり、刀剣と関わりの深い神宮である。

(7) 雄略天皇の遺物、二振りの銘剣のうちのの一つ。百十五文字の金象嵌文字が刻まれている『古代を考える 雄略天皇とその時代』(佐伯有清 吉川弘文館 1988年2月1日)での中で佐伯有清氏は以下のように解釈した。

(面) 辛亥の年七月中、ヲワケの臣。上祖、名はオホヒコ。其の兄、(名は) タカリのスケネ。其の兄、名はテヨカリワケ。其の兄、名はタカヒ(ハ) シワケ。其の兄、名はタサキワケ。其の兄、名はハテヒ



(裏) 其の児、名はカサヒ(ハ)ヨ。其の児、名はワウケの臣。世々、杖刀人の首と為り、奉事し来り今に至る。ワカタケ(キ)ル(ロ)の大王の寺、シキの宮に在る時、吾、天下を佐治し、此の百練の利刀を作らしめ、吾が奉事の根源を記す也。

(8) 稲荷山古墳のもの比べると、文字の残存状態が良くなく、釈文も定まっていない。次の原文は佐伯有清氏が解釈したものである。

天下治ろしめす獲加多支鹵大王の世。奉事の典曹人、名は無(利)豆が、八月中に、大鑄の釜<sup>■</sup>びに四尺の<sup>■</sup>刀(延べ金の刀)を用いて、八十練・(六)十<sup>■</sup>した(よく精錬を重ねた)三寸上好的利刀である。此の刀を服する者は、長寿にして、子孫は注々と(連綿と)三恩を得ることができ。統ぶる所も失われない。刀を作った者の名は伊太(加)であり、書いた人(銘を刻んだ者)は張安である。

としている。稲荷山古墳の鉄銘剣が発掘される以前は文頭の「(治天)下獲加多支鹵大王」を「(治天)下<sup>■</sup>宮弥都鹵大王」と読み、古事記に瓊之水歯別命、日本書紀に多遲比瑞齒別天皇と記される反正天皇を指したものだとする説が有力だった。しかし<sup>■</sup>を瓊、齒を鹵とする事への疑問は当時からあった。稲荷山古墳の鉄銘剣の「獲加多支鹵大王」とあることで「<sup>■</sup>宮弥都鹵大王」の読みも見直され、両者の銘文に同一の表記も見られるため現在では雄略天皇を指すと考えられている。

(9) 『新日本古典文学大系32 江談抄 中抄 富家語』(山根對助 岩波書店 1997年6月27日)に「聖徳太子の御剣の銘の四字の事に記述がある丙子椒林剣のこと」に次のような記述がある。

丙子椒林——吉切槐林——これ守屋の大臣の頸を切るなり。

(10) 谷村照『鉄と鋼第三号』「日本刀の冶金学的研究」 1998年

(11) テキストには『新編日本古代国文学全集1 古事記』(小学館 山田佳紀 神野志隆光 2007年8月5日)を使用した。

(12) 「生」は名詞の頭につくと、永遠の生命力を持つ、或いは旺盛な生命力を与える、などの意味を込めて、褒める意を表す

(13) また古事記の中で神武天皇の部下の装備としても「頭槌い」というものがあるがこちらは太刀ではなく、槌だとも考えられている。

居りとも 厳々し 久米の子が頭槌い 石槌い持ち 撃ちて止まぬ 厳々し

(14) 久米の子らが 頭槌い 石槌い持ち 今撃たば宜し  
『新編日本古代国文学全集1 古事記』(小学館 山田佳紀 神野志隆光 2007年)

逆まに波の穂に刺し立て、其の剣の先に踏み座て、大國主に問ひて言ひしく

昔、近江の天皇のみ世に、丸部の具といふものありき。是れ、仲川の里の人なり。この人、河内の国免寸の村人の持たる剣を買い取りき。剣を得て以後、家の拳滅亡びたりき。然るに後、苦編部の犬猪、その地の墟に圍るに、土の中ゆこの剣を得たり。土と相去ること、廻り一尺許るなり。その柄朽ち失せてその刃渋びず。光、明らかに鏡のごとし。ここに、犬猪、すなはち恠しと懷ふ心もて、剣を取りて家に帰るすなはち鍛人を招き、その刃を焼かしむ。その時、その剣、屈申すること蛇のごとし。鍛人大く驚き、営らずて止む。ここに犬猪、異しき剣と以為ひて、朝廷に献げたり。後、淨御原の朝廷、甲申の年七月に、曾根の連磨を遣りて、本つ処に返し送らしめ

たまふ。今にこの里の御宅に安置けり。

とある。テキストには『新編日本古代国文学全集5』  
 (風土記 植垣節也 小学館 1997年10月20日) を使  
 用した。

(16) テキストには『新編日本古代国文学全集2 日本書紀①』  
 (小学館 小島憲之・直木孝次郎・西宮一民・藏中進・毛利正守 20  
 06年6月20日)、『新編日本古代国文学全集3 日本書紀②』  
 (2006年) を使用した。

(17) 「刀剣書の成立」―「諸国刀鍛冶系図書」を素材として―  
 (藤田達生 2000年)

(18) テキストには『新編日本古代国文学全集20  
 (阿部秋生・秋山虔・今井源衛・鈴木日出男 小学館 19  
 93年) を使用した。

(19) 『新編日本古典文学全集12 伊勢物語』(片桐洋一・福井貞  
 助・高橋正治・清水好子 1994年 小学館) を使用した。

(20) 註(19)に同じ。

(21) 以下枕草子のテキストには『新編日本古典文学全集18』  
 (松尾聰・永井和子 1997年11月20日 小学館) を使用  
 した。

(22) たちは  
 たまつくり

(22) めでたきもの

唐錦。飾り太刀。作り仏のもくゑ。色合ひ深く、花房長く咲  
 きたる藤の花、松にかかりたる。

(23) 細太刀に平緒をつけて、清げなるをのこ  
 細太刀に平緒をつけて、清げなるをのこ持てわたるも、  
 なまめかし。

(24) テキストには『新編日本古典文学全集41 将門記 陸奥話

記 保元物語 平治物語』(柳瀬喜代志 矢代和夫 松林靖  
 明 信太周 犬井善壽 小学館 2002年2月) 使用した。

(25) 註(24)に同じ  
 (26) 註(24)に同じ

(ながつか・ゆうき 成城大学大学院博士課程前期)